

■学位論文内容要旨

5歳児のリレーの保育目標とその指導法に関する研究

—乳児期からの取り組み—

那須 とよみ (2016年度修了)

【研究の背景と目的】

保育者や年長児にとって運動会は、保育園生活最後という意味で思い入れがある。特に「リレー」はチームで取り組むので運動面と社会性の発達の両面の育ちが求められる貴重な保育経験の場である。しかし近年、「全力で走る」姿に変化を感じる。顎が上がり、前傾姿勢はとれず、腕を振るというよりは肘を水平にしたまま左右に動かしている、足の運びはドタドタと乳児の走り方を残しているという走り方の子どもが増しているという実感を持つ。日常生活でも、すぐ転ぶ・空間認識が弱く手足がぶつかる・平面でバランスを崩し転倒し、その際手が前に出ず頭部・顔面・口や歯の怪我が増えている。一方勝敗に一喜一憂しながら、負けた悔しさや転んで気持ちを立て直すなどを通してバトンを繋ぐ大切さを幼児なりに学び、社会性を伸ばしていく場面も見られる。

本研究では、現在の子ども達が抱える身体面の育ちの歪みに対しての乳児期から姿勢と運動の発達課題を整理し、5歳児のリレーの保育目標とその指導方法について、運動会における5歳児の取り組みを中心にプロセスを含め、望ましい今日的指導方法を明らかにすることを目的とする。

【研究の方法】

本研究の方法は、以下の3つである。第1に年長児にとってのリレーという教材の意味を整理する。第2に1978年から概ね5年ごとに行われている「子どものからだの調査(最新2015年)」等先行研究を基に、子どもの

身体の問題について考察する。さらに乳児期から幼児期までの姿勢と運動の発達について「首すわり」から「二足歩行」および「走行」までの先行研究を整理し、子どものからだのおかしさ」とそれに対応する働きかけについて分析する。第3に「リレー」という教材について運動と社会性の発達から保育士の指導方法を考え、指導計画の作成を試みる。

【研究の結果】

年長児は、姿勢と運動能力の個人差はあるものの、不随意的な姿勢が減少し、合理的な姿勢制御ができ始め、運動の基本は走活動になる。また、社会性では、共感感情の発達とともに、失敗などが受容され、励ましに応え納得して再出発できる感情が自己形成視に繋がる。リレーの活動は、運動と社会性の両面から年長児の発達を促すにふさわしい教材と整理した。

しかし、姿勢と運動発達については、姿勢の保持ができない、怪我が多いなど深刻な問題がある。子どもの運動能力の変化についての調査について国レベルで行っている調査「子どものからだの調査(最新2015年)」からは、自律神経との関係性、前頭葉との関係性、背筋力の低下と姿勢保持の関係性、睡眠不足の影響などが確認され、子どもの育ちの歪みが小学校からではなく、すでに幼児期から始まっていることが分かった。「からだのおかしさ」の課題解決は乳児期からの姿勢と運動発達に押さえるべき点があると分析を進めた。すべての姿勢と運動発達には「抗重力筋」が必要であり、寝返り、お座り、ハイハイと発達していくうえで欠くことのできない力であった。この抗重力筋の弱さが姿勢の保持ができない背

景にあった。また「保護伸展反応」の弱さが、転んだとき手で身体を支えられない主な要因であった。さらに、感覚統合の視点からも検討した。五感といわれる視覚、聴覚、臭覚、味覚、触覚はなじみが深い、以下の二つは普段は意識にのぼらない感覚として存在している。「前庭覚」は、重力を含めた加速度を感じ身体の傾きや動きを感じる感覚であり、「固有受容感覚」は筋肉や関節の状態を感じる感覚であり、この七つの感覚を通してヒトは周囲の状況を把握し行動している。乳児期にはその後の礎となる姿勢や運動の節があるが、その発達の道筋をふまえて、「抗重力筋」「保護伸展反応」「感覚統合」の視点から「走行」までの姿勢や運動の発達を促す働きかけについて考察した。その主体的な獲得のためには大人との応答的關係は基本であり、“あやしあそび・わらべ歌”などを通して応答的に皮膚感覚を刺激し、神経系に働きかける有効性を考えた。また、個々の身体に働きかけ色々な姿勢を遊びを通して体感させることが、しっかり走ることのできる身体づくりに結びつくと考えた。

以上の分析をふまえて運動と社会性の発達から保育士の指導方法を考えた。運動面について、リレーに取り組む前までの具体的な関わり方として①ベビーマッサージと赤ちゃん体操②じゃれつきあそび③わらべ歌、親子遊び④さくらんぼリズム⑤水遊び、プール遊びについて効果を検討しながら整理した。社会性の発達ではリレーにおける相談活動に着目し、整理した。子ども同士の話し合いにおける援助では、話し合いのタイプについて以下のように分類を行い、実際のリレーについての相談場面を考え、保育士の配慮を整理した。

- A：単純な会話：いろいろなかけっこをしての感想
- B：計画について話し合う：チーム分けや順番、役割
- C：トラブル・問題が起こった際の共通理解と問題
- D：障害児等を含めてのチーム編成についての提案

さらに、リレー指導のポイントを含んだ「指導計画」(月案)を作成した。その際、リレーのねらいは以下の3点にした。①走運動の基本形態が獲得され、友だちと一緒に全力疾走する喜びをもつ。②リレーを通して、様々な葛藤や負の体験をし、気持ちの修復や仲間との共感関係を深める。③障害のある子等と一緒に取り組む中で、工夫や相談を重ね、互いを認めあう集団をつくる。

【まとめと今後の課題】

本研究では、現在の5歳児のリレーの指導法について身体づくりと話し合いの視点から研究した。今回の研究を通して、5年ごとに「からだのおかしさ調査」が行われており、現場の実態を反映する内容であったこと、姿勢保持や保護伸展反応に困難を示す子ども等に乳児期の遊びや姿勢運動の追体験が必要なが分かり、それらをふまえてリレーの取り組みに向けた長期的な指導計画を作成した。

6歳には走運動の基本形が完成し、その姿勢と運動の発達が生涯にわたって影響を与えると言われる。一方友達関係から、集団関係へ社会性が発達する時期でもある。日中の長い時間を過ごす保育所における個々の友達との関係は、安心して自己を主張し、失敗を受けとめ許し、何でも話し合える仲間関係へと発展する貴重な場所である。

しかし、障害を持った子だけでなく、「気になる子」もクラスの中では増加の傾向を示し、日々の保育の困難さに繋がっている。今回の研究成果を実践し、検証することが必要と考える。そして社会福祉施設における教育の役割を認識し今後も研究を重ねたいと考える。